

人権・同和教育シリーズ 172

問い合わせ先 人権啓発課
0968(25)7209

市民の手による「まちづくり推進委員会」の活動

地域人権教育指導員 稲田京子

本市には、これまで大事にしてきた誇るべき活動がいくつもあります。その一つが「まちづくり推進委員会」の活動です。

良い啓発になるよう意見や助言をする活動もしています。

③ 10月、市内在住の松川健二さんの熱い思いに触れました。「障がい者当事者の視点でみたまちづくり」と題して「事故で、車いすの生活になったが、泣き寝入りしたくなかった。自分の体をさらけ出して闘った。誰かが言って、誰かが交渉していかないと社会が変わらない」という考えのもと、全ての人のために使いやすい施設を各方面に提言し、改善してきた取り組みに参加者は大きな感動を受けました。

まちづくり推進委員会

毎年、市から18人の方が委嘱され「まちづくり推進委員会」が設置されています。市内13各区の校区推進会議、人権擁護委員会・民生児童委員会・身体障がい者福祉協議会・女性の会・自治公民館長会などからそれぞれ推薦された人々です。

一人が大切にされる「差別のない明るいまちづくり」の実現のため、地域で主体的に活動できる人材を目指し、年間8回の研修を行っています。研修では、

② 9月、教育集会所で部落解放同盟の松永末廣旭志支部長の講話を聴きました。参加者から「フィールドワークに参加して、同和対策事業によって自分たちの地区だけでなく、隣接している他の集落も道路などが改善され、周囲も一緒に良くなって、広く地域全体が改善されてきたことを初めて知りました」「部落差別の現実を学び、正しい認識を深め、差別をなくすよう推進

12月の「市人権フェスティバル」では、スタッフとして運営に携わりました。人権啓発リーフレット「ふるさと」（年3回発行）や広報きくち「人権・同和教育シリーズ」について、より

身近なところに、みんなの幸せを願って差別をなくし、暮らしてよくするために生き生きと踏ん張っている人がいます。そんな人たちの生き方に学びながら、発信し続ける会員の地道な活動を心強く感じています。

学んで発信し続ける



松永末廣旭志支部長の講話

韓国発見シリーズ⑦ 韓国の女性が直面するガラスの壁



韓国発見シリーズ⑦ 韓国の女性が直面するガラスの壁



国際観光マネージャー 金相廷

女性差別をテーマにした小説「82年生まれ、キム・ジヨン」が映画化され去年10月に公開された。上映2週間で300万人を動員し大ヒットとなった。2018年には日本でも翻訳出版され、すぐにアマゾンジャパンのアジア文学部門の売上高で1位になった。日本で韓国文学がここまで注目されることは異例のことだという。NHKでもドキュメンタリーが放映され、多くの日本女性たちから共感を

後には「ママチュン（自己中心ママ虫）」と卑下され、見えないガラスの壁が彼女を取り囲んでいる。今の韓国社会が女性に向ける冷たい視線、見えないう差別が女性を制約し抑圧する様子が描かれている。

この小説は1982年生まれの女性主人公キム・ジヨンさんを取り巻く家庭や職場また韓国社会、結婚後の婚家での立場などで女性であるが故に受ける抑圧、理不尽をリアルに描いた作品である。

実際、最近の韓国では女性芸能人の自殺がたびたび起きています。彼女たちに対する容赦ない攻撃はSNS上では異常で止まるところを知らない。この点について建國大学ユンキム・ジョン教授はインタビューで「悪質な書き込みの根源には社会が要求する女性像を規定し、これに合わない女性に向けて行う女性嫌悪があるのです。こうした観点からみれば、悪質な書き込みは従順ではない若い女性を私たち社会が断罪していると分析することができると答えた。

彼女が女兒の中絶が最も深刻だった時代に生まれ、女性が受けるさまざまな抑圧に直面して生きていく。厳しい就職競争を突破してキャリアを積むが、社内では有能ゆえに煙たがられる。結婚し妊娠すると「経断女（出産や育児で職場を離れキャリアが断たれること）」となり、出産

人には良心があり、基本的な道徳心や温かい思いやりが備わっているはずなのに、他人を自分の物指しで測り、外れると攻撃し鬱憤を晴らす結果を韓国社会はどう償うのだろうか。それでも人間の心の深いところには純粋な心があると信じたい。